

2022 年度アカデミック・ポートフォリオ 作成ワークショップ開催報告

北野健一^{*1}, 川上太知^{*2}, 金田忠裕^{*2}, 東田卓^{*2}

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2022

Ken'ichi KITANO^{*1}, Taichi KAWAKAMI^{*2},
Tadahiro KANEDA^{*2} and Suguru HIGASHIDA^{*2}

要旨

大阪公立大学高専は、2012年3月に全国の高等教育機関で初めて学内・対面でアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、毎年2~3回のワークショップを対面で開催し、教育改善に取り組んできたが、2020年から始まった新型コロナウイルスの流行により、対面でのワークショップ開催は断念せざるを得なくなった。そこで同様のワークショップをオンラインで開催できないか模索し、2021年度にオンライン型のワークショップを2回、2022年度も2回開催することができた。本稿では、2022年度に開催したアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップの概要について説明した後、ワークショップ参加者の感想をメンティー、メンター、スーパーバイザーの立場から述べる。また、ワークショップ後にメンティーに対して実施したアンケートの結果から対面開催との差異について考察する。

キーワード: アカデミック・ポートフォリオ, 教育改善, 統合, メンティー, メンター, ワークショップ

1. はじめに

アカデミック・ポートフォリオ(以下AP)とは、「教育、研究、サービス活動(社会貢献・管理運営等)の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり、教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[1]。

APの最大の特徴は、教育・研究・サービス活動、互いの連携・寄与について考察する「統合」の章にある。また、これまでの成果から最も自分が誇りに思うものを3つあげて記すこともAPの大きな特徴である(これは、教育1つ、研究1つ、サービス活動1つと決まっているわけではなく、教育を重要視する教員ならば教育から3つ選ぶ等、教員の活動スタイルにあわせることができる)。

さらに、将来達成したい目標を3つ記す点も「業績リスト」と大きく異なる点である。これらを十分な自己省察を行いながら記述していく。APは一人で作成し完成させることも可能だが、ワークショップ(以下WS)に参加

し、メンター(AP作成経験のある教員)の助言とサポートを得ながら一気に書き上げることで完成度も質も高めることができる。WSでは複数回の個人メンタリングがスケジュールの中に組み込まれている。それ以外の時間は基本的に自らの活動を省みつつ行う個人作業が中心であり、適宜作成途中のAPをメンターに提出し、メンタリングを受ける。そこでの助言をもとに改訂を重ね、最終的にAPを完成させる。詳しくは、ピーター・セルディンらの書籍を参考にされたい[1]。

2012年3月、大阪公立大学高専(当時は大阪府立大学高専、以下本校)は、全国の高等教育機関で初めて単一教育機関内AP作成WSを開催した[2]。その後もFD活動として、継続的にAPに取り組んでいる。また、それに先駆けて2008年度から、教育に特化したティーチング・ポートフォリオ(TP)、2012年度からは、事務職員のスタッフ・ポートフォリオ(SP)に取り組んでいる。

本校は2019年度までTP/AP/SP作成WSを、年2回夏と冬に対面で開催してきたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止対応のため、夏は中止となり、冬はオンラインでTP作成WSのみ開催した[3]。2021年度よりTP作成WSに加え、AP作成WSをオンラインで9月と12月の2回開催している[4]。

本稿では、2022年度に開催したAP作成WSの概要につ

2023年9月1日 受理

*1 総合工学システム学科 一般科目系

(Dept. of Technological Systems : Liberal Arts)

*2 エレクトロニクスコース (Electronics Course)

いて説明し、アンケート結果を基に対面開催との差異について考察する。

2. ワークショップの概要

表1に開催したWSの主なスケジュールを示す。なお、このスケジュールは9月、12月ともに共通である。また、AP作成WSと同時に、TP作成WSを同日程で開催した。第3日午後の「APプレゼンテーション」では、作成したAPの理念や教育方法等をA4サイズ1枚のレジュメにまとめて発表することを修了証授与の要件とした。その際、教育、研究、サービス活動の互いの連携・寄与が良くわかるように、教育・研究・サービス活動、それぞれを表す3つの円を重ねた「APチャート(三相図)」および目標をレジュメの中に記してもらった。

表2に開催したWSの参加者数を記す。なお第20回のメンティー1名および第21回のメンティー1名はSAP(Structured Academic Portfolio: 構造化アカデミック・ポートフォリオ) [5] コースの参加者である。ここでAPとSAPの違いを述べる。APはTPを作成済であることが前提であり、TPの凝縮版に研究、サービス活動とこれらの統合に関する記述を加える方式で作成する。一方、SAPはTPの作成を前提としておらず、事前課題としてSAPチャートを作成することで3日間のWSでAPを完成させる。

表1 開催したWSの主なスケジュール

| | 第1日 | 第2日 | 第3日 |
|----|--------------------------------------|-------------------------------|--|
| 午前 | オリエンテーション APチャート作成 | 個人メンタリング(3) AP作成作業 | 個人メンタリング(5) AP作成作業 |
| 午後 | 個人メンタリング(1) AP作成作業 個人メンタリング(2) | 中間発表 AP作成作業 個人メンタリング(4) | AP作成作業 プレゼン準備 APプレゼンテーション 修了式 |
| 夜間 | 意見交換会 AP作成作業 | AP作成作業 | 修了を祝う会 |

表2 開催したWSの参加者数

| | メンティー | メンター | スーパーバイザー |
|-----------|------------|------------|------------|
| 第20回(9月) | 4名(うち学外3名) | 4名(うち学外2名) | 1名(うち学外0名) |
| 第21回(12月) | 2名(うち学外2名) | 2名(うち学外0名) | 1名(うち学外0名) |

3. アカデミック・ポートフォリオを執筆して

アカデミック・ポートフォリオを作成して(青柳智子)

今回、アカデミック・ポートフォリオ(AP)を作成したきっかけは、2022年9月に東京大学で実施された「インタラクティブ・ティーチングリアルセッション」にある。私は普段、大学や専門学校の非常勤講師としてキャリア・デザインを担当している。キャリア・デザインという正解のないもの、一人ひとり異なるものを教育現場でイチ科目としてどの学生にもわかりやすく伝えていくにはどのような授業をつくっていくべきか悩んでいた際にこのセッションに参加した。そこで、自分がこれまで自身の専門性に頼りすぎていたこと、もっと学生が目線に立つことが重要であることを実感した。以前から分かっていたはずのことができていなかったことを痛感したのである。多くの学びを得たセッション終了時に案内頂いたのが、今回のAP作成であった。独りよがりの授業ではなく、双方向の授業を実現することで学生の理解をより促進しようと心に決めた私にとって、AP作成を通じて自分自身の授業や活動を振り返り、言語化する機会は必要不可欠だと感じたのである。

AP作成を進める中でこれまでに実践した授業や活動を整理していると、多様さの中にも一貫して自分自身が大切にしていること、追求していることが見える瞬間があり、それが理念につながっていることを改めて感じた。また、教育、サービス、研究と分類して考えることで、実践の中で課題感を持っていたことにじっくりと向き合うことができ、今後取り組むべきアクションが明確になった。特に、研究については目標に置きたい項目が多くあったため、APのタイトルを「教育とサービスの省察とこれからの研究」とした。

このように書くとなんまりと作成できたように捉えられるかもしれないが、これらの気づきには決して一人では辿り着けなかったと思う。メンターの方が丁寧に粘り強く問いかけて下さったことによって、多くの新たな視点をいただき、内省を深めることができた。

作成してから半年が経つ現在も、AP作成の経験は私の活動の道標となっている。そして、メンターの先生方が仰っていた「作成した後が重要である」ということを実感している。実際に目標に向かって動き出すことにより明らかになることが多々あり、変化することもあるため、今後もタイミングを見てAPを更新していきたいと考えている。

最後に、オンラインという状況でも常に安心安全な場づくりをしてくださった北野先生をはじめ、メンターとして伴走してくださった金田先生や関係者の皆様にご心より感謝を申し上げます。

アカデミック・ポートフォリオを作成して（飯野矢住代）

2021 年度にティーチング・ポートフォリオを作成し、自分が大切にしていたことに確信が持て、また、そのことで学生と一緒に働く仲間に、自分の考えとして迷いなく伝えることができるようになり、わずかではあるが教育活動がやりやすくなった。このような経験からアカデミック・ポートフォリオを作成することで、さらにいい方向に進むのではないかと思った。私の大学教員としての三つの実践（教育、研究、サービス）を接近させたり、俯瞰したり、先を見たりしてみたいとも考えた。

アカデミック・ポートフォリオ作成にあたって、まずはティーチング・ポートフォリオを凝縮することが求められているため、改めてティーチング・ポートフォリオを見直し、更新することにした。その結果、改めて実践力のある保健医療専門職の育成を目指して学生と関わってきたことがわかった。実践力とは、頭で考えて、手を使って、ところを添えることができ、それらに責任を持つことであると考えてきたが、さらに個を大切にしながら、社会や地域に働きかける視点、個と集団を見通せる広い視野を持って考える思考（バランス）は大切だという考えに至った。また、育成にあたり、授業の冒頭で丁寧に説明することや説明にあたっては丁寧に準備を行うようにしてきたことがわかり、専門職を育成することは、人生を生きる、生き抜くことにも通じる思考、実践だと考えるに至った。私にとって、ティーチング・ポートフォリオの更新はとても重要であった。その後、アカデミック・ポートフォリオを作成し、教育、研究、サービスは単一ではなく、例えばスタートは教育であったとしても、その中にサービスと研究の視点を持ち合わせ三方向で考えていく。そういった思考のもと大学教員として役割を果たしてきたことがわかった。また、改めて、今の私があるのは、多くの人々との出会いだと感じた。今まで出会ったすべての皆さんに感謝したいと強く思った。まだすっきりしないところもあるが、私が大切に考えてきたことが少し見え、そこに至るまでを意識化できたことはよかったと思っている。自分自身で、まあ、頑張ってきたのではないかと少しだけ思える時間でもあった。そして、今後も自分の考え（先人たちからものも含め）を受け継いでくれた人たちを社会に送り出していきたいとも思っている。

ティーチング・ポートフォリオ、アカデミック・ポートフォリオ作成の際、長期目標として掲げたことが願い叶うような不思議な経験をしている。ことば（公言することや活字にすること）にする力が加わっているのではないかとも思っている。

作成過程は決して容易いものではない。自分が何をしてきたのか見失ってしまいそうなきももある。そんなとき、メンターとして伴走してくださった東田さんには幾度となく助けられた。こころより感謝している。また、ワークショップで一緒だった北野さんはじめ皆様にお礼申し上げたい。

AP を執筆して（岡崎昭仁）

確か、夜な夜な TP 研究会の勉強会に参加した際に、北野先生から本 WS の紹介があり、申し込んでみたら、参加できることになり、まずは TP を書いた。その半年後であろうか、続いて AP を書くことにした。さて、執筆してみた感想と書くことの意義について述べてみることにする。その前に、昨今では学生の学修成果を測定するツールに『ショーケース・ポートフォリオ』があるようである。就活などに備えて、厳選した成果を示すようで、何か TP や AP と似ていると感じている。さて、AP を執筆した感想について書くことにする。

既に TP を書いていたので、これを短縮化して、『研究』と『サービス』を付加すれば良い、というわけではない、と WS では痛感することになる。各々を書いた後に、『統合』という作業がある。結局、教員としてのコアは何だろうか？なぜに教員をしているのだ？なぜに研究と教育をするのか？その関連性は？学内の委員会なんて教育と研究に関係ないよね？・・・等々、迷走が始まる。そう、研究費の申請書や学術論文を書いているような濃い霧が立ち込めた沼地を孤独に彷徨っているような境地に陥る。辛い彷徨の時間である。

このような時間を過ごし、自分なりの考えを持つと、『メンター』が話をじっくりと聴いてくれて、様々な質問を投げかけてくれる。何とというか、共感と気づきを与えてくれる（この時間を『メンタリング』というようだ）メンタリングが終わると、再び、沼地に降り立つが、メンタリングを重ねるごとに、霧が薄くなり、足場も固く、何か遠くに目指すべき場所が見えてくるような感じになる。この時間は二日間であったろうか、続くのである。一日目の夜であろうか、就寝していると、『止めてしまえ、楽になれ』と何者かが囁いていた。WS の間、三日間は、居室をノックする何者も無視して、集中する気概が必要である。

二日目の夜か、三日目の朝か、定かではないが、『あっ！』と気づきを得た。後は書くだけ、一気に作業は進むのである。多分、一人では到達できず、メンターの先生、スーパーバイザーの先生、そしてメンタリングチームの後押しがあつての気づきである。気づくのは執筆する本人だが、そこまでの過程には、メンタリングチームの存在価値は極めて大きい。

AP を書いて以降、所属機関で TP チャート WS と SAP チャート WS を開催している。自身を振り返って、より良い教員生活を送る教員が一人でも増えることを願っている。

AP を執筆して (鴨下顕彦)

2022 年 9 月に大阪公立大高専での AP 作成ワークショップへの参加の貴重な機会をいただいた。大変意義深いワークショップを開催くださった、大阪公立大高専の先生方、とくにスーパーバイザーの北野健一教授、東田卓教授、メンターの金田忠裕教授に感謝しながら報告する。

経緯

先立って、2022 年 4~7 月に、東京大学の第 19 回 Future Faculty Program を受講し、栗田佳代子教授の指導で、SAP チャートを作成した。続きとして AP 作成があることも紹介され、タイミングよくこのワークショップを受講できた。

SAP チャート作成と AP 作成では、教員の外的な成果だけでなく、考え方や影響を与えた出来事や出会いをも抱合していた。人格的なものを大切にす視点に共感した。教育業績として、担当講義がリストされ、指導学生数が記載されることはある。AP 作成には、このような教育評価としての役割もあるが、個人の生き方まで掘り下げていて、作成者をより懇ろに扱っているように思う。

執筆

ワークショップ初日の途中のファイルを見返すと、指導いただいた項目にしたがって、SAP チャートでまとめた内容や途中の文章が貼り付けられていた。そこから 3 日目のプレゼンを意識して、ベン図の作成、つまり、教育、研究、サービスの 3 領域の統合をめざしながら進められた。自分を振り返るための集中が必要であった。SAP チャートで輪郭はできていたが、そこからの文章化は骨が折れる長い行程であった。メンターを引き受けくださった金田忠裕教授との面談がなければ、たどり着けなかったろう。有益な助言をいただいた。例えば、どういう研究手法があるのかリストしては、とか、この表は作りましょう、これはどういう意味なのですか、研究室の学生に読んでもらってみてはどうか、等。自分の考えも曖昧であった所もあり、それを受け止めるメンターの仕事、そのメンターを支える体制は、大変であったろう。ワークショップでは、参加者同士の「意見交換会」(初日夜)、参加任意の「修了を祝う会」(最終日夜)があったが、経歴の異なる意識の高い参加者と語った機会も貴重で、懐かしい。

効用

おかげをもって、とにかく第 1 版が出来上がり、10 月に HP でも公開した。研究室で学生たちに読んでもらった。その後人事案件が起こり、部局長や、選考委員にも AP が読まれることにもなった。「農学の倫理をどのように考えているのか」という質問を受け、さらに、自身の考え方や今後の方向性を考える契機ともなった。現在に至るまで、修正を続けており(最新版は 2023. 6. 30)、また留学生のことも考えて、英語版も作成して公開している。今後改訂をしたい。

東南アジアに出張した際に、若手の共同研究者と、AP のことを話題にしてみたことがある。個人の能力と生き方を尊重しながら作成される AP は、外国の研究者たちにとっても、有益であるように感じた。AP 作成のノウハウが広く伝えられてゆき、国籍を超えて、多くの方がこのことから益を受けることを願う。

AP を執筆して (川上太知)

私はこれまで、ティーチング・ポートフォリオの方をメンター及びメンターの両方を経験したが、今回は昇任人事に伴い、アカデミック・ポートフォリオのメンターを体験し、自分なりのポートフォリオを執筆した。ワークショップはコロナの影響も考慮してオンラインでのメンターとの対話となった。自身が対面での経験しか無く、会議室に寿司詰めになって執筆するという印象があったため、オンラインでの対話や自身の研究室で一人で執筆するというのは少しの寂しさとも一抹の不安を覚えたものである。

メンターは本ワークショップに何度もメンターで参加してくださっている福井高専の長水先生にご担当いただいた。長水先生は非常に丁寧にこちらの考えを聞いてくださり、TP からのブラッシュアップを行うことができた。振り返ると過去のメンターの方も温かな方で、私の根底にある考え方をうまく引き出してくれるような話し方であり、TP を経験しているためか、私としては AP 執筆作業は TP 執筆の時よりも順調に進んだように思われ、いつしか当初の緊張もほぐれていた。

私の TP は「守破離」をテーマにしたものであり、着任初年度に TP を執筆して以来、自身の教育の根底に力強く根付いている。実際に、守破離を念頭に高専教育を続けていくうちに研究室も非常に大きくなり、私自身も様々な仕事を任せてもらえるなど良い指針となっている。

そのため、その TP の内容を軸に、より広く深い自身の指針となるような AP が執筆できればと思いき長水先生と話し合った。

そのなかで、長水先生は「教育理念として守破離を掲げているが、守破離は方法論に近いかもしれない。なぜ

川上先生は守破離を大事にしているのかという部分を突き詰めてはどうか。」ということをお願いした。

私自身は目から鱗が落ちるように感心し、今まで掲げていた守破離はまだ根底にあるものではないのではないのかという大きな気づきを得ることができた。そこからは守破離を自身の教育方法の一つと捉え、自身の根底にあるものについて長水先生と話し合いながらなんとか引き出すことができた。

このようにして、コロナの影響がまだ落ち着かない中のオンライン対応 APWS ではあったが、メンターの長水先生をはじめとする皆様の多大なサポートのおかげで無事に書ききることができ、自身の教育の根底を再発見・再確認・再構築することができた。改めて自身も良いメンターになりたいと感じた。

4. メンターを担当して

オンライン AP メンターを経験して (金成明美)

自分自身の TP, AP ともに大阪府大高専 (現大阪公立大高専) で書かせていただき、そのご恩返しというおこがましいのだが、メンターのご依頼があるたびに、どのようなご縁が繋がるのだろうか? と半ば期待を胸に、メンターとして参加している。

今回は、オンラインであることで3つの心配が頭をよぎった。「長時間の Web システム使用に、私自身が所属する大学のシステムが耐えられるのだろうか」、「対面型の WS でおこなっていたメンターとしての経験は通用するのだろうか」、「オンラインという特性から、画面に現れない視線の揺らぎなど、ノンバーバルコミュニケーション部分を読み取ることができるだろうか」である。結論としては、対面型 WS もオンライン WS でも、メンタリングそのものには大きな差はないということが、今回の発見である。

Web システムに関して、高専側の最大支援による Zoom や Google Classroom 機能のフル活用で、伴走者として3日間完走することが出来た。所属大学校舎の大規模停電で、急遽別の部屋を探し、オンライン中継が途切れるたびに PC を複数台渡り歩いたことは、そのときは大変な思いであったが、今は「あれも乗り越えられた」というおかしな方向の自信に繋がっている。また、メンタリングについては、メンターミーティング時に担当メンターとしての見落としにはメンター陣とスーパーバイザーからの適切な方向性の指示や参考意見もいただきながら、メンティーが心の奥深くにしまい込み、見せたくないのか、はたまた見たくないのかを、画面上に現れないノンバ

ーバルな部分についても、想像し、引き出し、確認し合う作業を繰り返した。コミュニケーション不足については、オンラインの「限界」という単語が頭をよぎったが、論語で言うところの「今、汝画れり」の教えのように、限界と決めつけることが人間の可能性を狭めていると自ら励ました。

さて、今回の出会いも大学人としての自分を見つめ直す機会となった。AP の場合、幼少期から今までの人生観も含めて生活歴そのものを受け止め、メンティーらしさを表現する AP (教育・研究・サービス) の中心はどこか? メンティーが悩み、言葉を見つけ出すことに戸惑い、伴奏者としてともに時には言葉の海に潜り、漂い、コアを見つけ出して浮上する、その瞬間に立ち会えた瞬間、感動したと同時に、自分自身の課題と解決策にまでも光が差すように感じた。APWS での経験は、大学人として支え合う互助、共助、そして変革する教育システムの荒波にも負けずに乗り越える自助の力について、改めて再認識させてくれたことに、大変感謝している。

オンライン APWS でメンターを経験して (金田忠裕)

コロナ禍の APWS、当初は対面で出来ていたことがオンラインで出来るのかという不安があった。しかしながら、所属学会の講演会や、学校の授業などでも同様の問題があり、手探り状態で利用できるツールの長所短所がわかり、ここ3年でオンラインの APWS のスタイルが出来上がった気がする。対面で実施してきたイベント等をオンラインで実施する場合に利用した機能を表3に示す。

表3 オンライン WS に利用した機能

| 利用した機能 | イベント等 |
|-----------------------|-------------------------------------|
| Zoom のブレイクアウトルーム | メインミーティング (MT)・メンター MT・個別 MT・最終プレゼン |
| Google の Classroom 機能 | 資料の保管と提出 |
| Google のスライド機能 | To be a good mentor |
| メールと電話 | 接続できない方への対応 |

このように対面で実施してきたイベントを全て網羅できた気がしている。これも本校の TP 研究会のリーダーである北野健一氏をはじめとして、研究会全員の協力があったからだ感謝している。

次に対面 WS と比較した長所と短所を表4に示す。

表 4 オンライン WS における長所と短所

| | |
|----|---|
| 長所 | <ul style="list-style-type: none"> ・旅費・宿泊費や時間などの面で、遠方の方でも参加の敷居が低くなった ・印刷する手間が省ける |
| 短所 | <ul style="list-style-type: none"> ・メンタリングで相手の言動が察知しづらい ・俯瞰図が画面上に制限される ・ワンテンポ遅れての反応になる |

最後に TP/AP メンタースキルにナラティブ・アプローチの技法が使われているとわかったことから[6]、オンライン WS について、これらの技法が十分に発揮できたかを考察してみる。

マイケル・ホワイト氏が提唱した 6 つの技法「外在化する会話」「再著述する会話」「リ・メンバリングする会話」「定義的祝祭」「ユニークな結果を際立たせる会話」「足場作り会話」は本来、対面でおこなうナラティブ・セラピーで利用されるスキルである。しかし、オンラインでもタイミングが少し遅れるかもしれないが、利用できるスキルであることがわかった。

今後の課題は表 4 に示した短所の部分を如何に個人的に補うかだと考えている。モニター画面が大きければ、作成した AP を比較することが可能であり、俯瞰図を拡大することでわかりやすくなり、メンタリングを進めるためには都合が良いと言える。ただし、「察知」と「タイミング」は画面を通すとどうしても時間的にズレてしまうため、何か別の手段を検討したいと考えている。

オンライン APWS でメンターを経験して（長水壽寛）

2022 年 9 月の WS で、AP のメンターを担当することになった。それまでに、オンラインでのメンターを 3 回経験し、オンラインの WS にもそれなりに慣れてきたところであった。

オンライン WS での AP 作成作業は、結局のところ個人作業となる。対面での WS では、大部屋で、他のメンターと一緒に作業していることで、ある種の仲間意識も芽生え、お互いにいろんな影響を感じることができる。またメンターとしては、実際に作成の様子を確認することができないのは、多少なりとももどかしさを感じていた。しかしその反面、メンターミーティングで、他のメンターそれぞれの原稿を Google Classroom 上で共有することができ、資料の共有、デジタル化など、対面の WS でも使える手法が増えたと思われた。

今回担当したメンターは 6 年目の高専教員であった。普段からいろんなことを考えながら教育活動、研究活動をされており、いつものことではあるが、今回の WS でもメンターから多くのことを学ばせて頂いた。

AP では、教育活動以外に、研究活動、サービスを加え

て、これら 3 つの要素をまとめ、その関係性からメンター自身の教員としての特徴（コア）を再度確認する必要がある。WS の期間中、メンターはこれまでの活動を振り返り、文章化し、コアを探し、見つける作業を繰り返す。メンターはそのお手伝いを行うのであるが、私自身は、初めての AP のメンターということもあり、いつも以上に、「メンターの中にあるものを引き出せているだろうか」、「上手く整理できているだろうか」、「ちゃんと伴走出来ているだろうか」と、問いかけながらの WS であった。これもいつものこととはいえ、メンターミーティングでは、チームとして皆さんに支えて頂いた。本当に有り難かった。

カバーページ作成は、メンターが文章化しているものを図式化し、関係性を構造的に整理する作業となる。私自身の AP 作成ではこのカバーページ作成がかなりの難産であったが、カバーページ作成の過程が WS にとってはとても重要であると感じている。今回も、メンターが WS を通して、自分自身の中にある大切な言葉を見つけ、気づいてもらえたとしたら幸いである。

毎年この学び多い WS に参加させて頂き、大阪公立大学高専のスタッフの皆さんには本当に感謝します。オンラインでの WS が続いているが、この期間に培ったノウハウや気づきを、対面 WS で活かせる日が待ち遠しい。

メンターを担当して（東田卓）

自分自身の AP を 2011 年に執筆して 12 年が経ち、AP のメンターは今回で 13 回目となった。AP は教育・研究・サービスの 3 点を振り返り、その核（コア）を見いだしつつ、自身の大学人としての立ち位置を見出すことに意義がある。今回、2022 年の夏と冬に 2 名の方の AP メンターをオンラインで担当させていただいた。オンラインの学会やオンラインのシンポジウムは旅費も掛らず、移動の必要もないことから、気軽に参加できるメリットが大きい。しかし、AP のワークショップに関してはメリットばかりでは無い。メンターとして全力で対応し、お話しも傾聴するのではあるが、どうしても互いに見えない距離を感じる事が多いし、パソコンディスプレイの画面越しで本当にラポールが形成できているのかわかりにくいところもある。対面の場合、最初はぎこちなく個人メンタリングを始めても、初日に意見交換会をし、飲食をしながらメンター・メンター、メンター同士で職場の雰囲気話をしながら和気藹々として、膝を突き合わせながら心を和ませていく。執筆の合間にお茶を飲みながらメンター外のメンターとお話をして、ティーチング・ポートフォリオの考え方の視野を広げるなど、対面ワークショップならではの仕掛けがたくさん用意されている。それが、オンラインとなるとたった一枚のディス

プレイ画面越しでのみ、それも1時間などの制約の中で個人メンタリングを行う。メンティー側も個人メンタリングの時間以外は孤独に執筆することになる。(時として、個人の研究室で書かれている場合は飛び入りの雑用が入ることも多々ある。) まだまだ、オンラインでのワークショップに慣れない中、今回も全力で取り組ませていただいた。うち1名の方はTPのワークショップを他大学で書かれていて、当時はTPは完成したものの、まだTPに得心がいかれていないように感じた。APの2泊3日のワークショップでAPが完成をしつつも、肝心のTPについて再度見直していただくことにした。結果として、ワークショップ後、私にとって初めて「補習」をさせていただいた。年度終わりでもう一度オンラインメンタリングをして、ようやくTPの理念→方針→方法に一貫性が出て、お話を伺う限りとてもスッキリされたような感じがあった。メンタリングは正に一期一会、どう話すかによってポートフォリオの完成の形は違うかもしれないが、TPもAPもポートフォリオの最終はご本人のものであり、我々は常に伴走者としての意識は持たなければいけないと思いつつも、「こうすればよかったか?」などの自責の念も無いことは無いといつも感じている。2023年から対面をベースにワークショップが復活と聞いており、オンラインの時よりは少し気楽に、またメンターを楽しんでお受けできると感じている。

5. スーパーバイザーを担当して

スーパーバイザーを担当して (東田卓)

2022年度夏のWSにスーパーバイザー兼メンターとして参加した。スーパーバイザーは、5-6名程度のメンターチームで行われるメンターミーティングの統括を行う。今回は、AP作成4名(うちSAPと呼ばれる構造化AP作成者が1名)のメンターから構成されるメンターチームのメンターミーティングを担当することとなった。今回、私はAPのメンターをしつつのスーパーバイザーである。今回はAPのメンターも経験豊かな方ばかりであったので、スーパーバイザーとして一番重要なメンターミーティングのマネジメントも比較的楽にさせていただいた。メンターミーティングというメンター同士の会議の中で、直接メンタリングするわけではないが、メンターを通して感じるメンティーの人となりを感じながら、メンターミーティングをしている。自己省察がうまくいかない、執筆が進まないメンティーがいる中でもメンターミーティング内で情報共有して、次の個人メンタリングがうまくいくような意見交換を行う。また、スーパーバイザーは時には酒場の女将[7]的な、疲れたメンターを癒しつつ、メンターの聞き役としてメンターミーティングを進める

ことになる。今回も対面とは異なる難しいオンラインの環境でありながら、複数回のメンターミーティングを過ごすことができた。比較的メンター経験が少ないメンターが多い場合、メンターミーティングは経験の少ないメンターの「育成の場」となるが、ベテランのメンターが揃うと皆さんと一緒にになりながらメンタリングの方法を共有することがメンターミーティングの中心となる。経験豊かなメンターが多いメンターミーティングの場合、メンタリングのノウハウを学ぶ場でもあり、相互に大変勉強ができる。最後のプレゼンテーションで晴々とメンティーが話す様子を聴きながら、今回もこの2泊3日のワークショップを終えてほっとすることができた。今年以降、オンラインから対面に切り替わった場合は、是非以前のような「修了を祝う会」でスッキリしたメンティーと対面で乾杯したいものである。

6. メンティーの事後アンケート

WS終了後にメンティー4名にGoogle Formsでアンケートを実施した。6名中3名から回答が得られた(回答率50%)。表5にアンケート結果の一部を示す。

この事後アンケートの設問は、これまでの対面式WSの事後アンケートの設問と同じである。したがって、この2

表5 事後アンケート結果(一部抜粋)

| | |
|------------------------|--|
| 3. ワークショップのプログラム設計について | (2) ワークショップは自身のキャリアにとって有意義な内容だった (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 0名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名) |
| 4. ワークショップのスタッフについて | (1) メンターからの助言は役に立った (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 0名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名) |
| 5. ワークショップの成果について | (3) アカデミック・ポートフォリオは自身の業務改善につながる (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 0名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名) |
| 6. ワークショップ全体について | (1) ワークショップは全体的に満足できるものだった (そう思う 3名, どちらかといえばそう思う 0名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名) |

表6 オンライン式と対面式の比較

| 質問項目 | 運営方式 | オンライン(n=6) | 対面(n=41) |
|-----------------------|------|------------|----------|
| 自身のキャリアにとって有意義な内容だったか | | 4.00 | 3.76 |
| メンターからの助言は役に立ったか | | 4.00 | 3.80 |
| 自身の業務改善につながるか | | 3.83 | 3.63 |
| 全体的に満足できたか | | 4.00 | 3.88 |

年間のオンラインWSの効果を検証するため、表5に記した4個の質問項目について、2021年度のオンライン式WS参加者の回答(n=3)を加えて、これまでの対面式WS参加者の回答と比較した。「そう思う(4)」、「どちらかといえばそう思う(3)」、「どちらかといえばそう思わない(2)」、「そう思わない(1)」と、回答を()内の数値に置き替えて平均を取った結果を表6に記す。この結果より、オンライン式においても、対面式と同程度以上の効果が出ていることが伺える。ただし、オンライン式の回答数がまだ少数のため、もっとサンプル数を増やした上で議論する必要がある。

7. おわりに

本校が2022年度に2回開催したAP作成WSについて報告した。2回ともオンラインで開催したが、AP作成だけを目的とすれば、対面WSとほぼ遜色ない効果が出ることがわかった。本校では今年度も9月5～7日と12月26～28日に、AP作成WSを開催する予定である。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 17K01001, 20K12094 の助成を受けたものです。

また、拙著に寄稿いただいた青柳智子氏(キャリアコンサルタント&グループ wellbeing)、飯野矢住代氏(広島国際大学)、岡崎昭仁氏(神奈川工科大学)、鴨下顕彦

氏(東京大学)、金成明美氏(東日本国際大学)、長水壽寛氏(福井工業高等専門学校)に心より感謝いたします。

参考文献

- [1]ピーター・セルディン, J. エリザベス・ミラー著, 大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳, アカデミック・ポートフォリオ, 玉川大学出版部(2009).
- [2]金田忠裕ほか: 日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して, 大阪府立大学高専研究紀要, 第46巻, pp. 71-76(2012).
- [3]北野健一ほか: 日本初ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催して, 大阪府立大学高専研究紀要, 第55巻, pp. 31-38(2022).
- [4]北野健一ほか: 2021年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告, 大阪公立大学高専研究紀要, 第56巻, pp. 11-16(2023).
- [5]吉田壘, 栗田佳代子: 構造化アカデミック・ポートフォリオの開発, 日本教育工学会研究報告集, 14(4), pp. 15-21(2014).
- [6]金田ほか, ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップにおけるメンタースキルの考察 ~ナラティブ・アプローチの観点から~, JACT 第28回年会講演会, pp. 48-49 (2022).
- [7]大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著, 実践 ティーチング・ポートフォリオ スターターブック ~実質的な教育改善活動を目指して~, NTS 出版 P104 (2011).